

## 第 145 回技術士包装物流会関西支部研究会議事録

平成 31 年 4 月 15 日  
関西支部長 高垣俊壽  
作成 賀川義夫

開催日時：平成 31 年 4 月 11 日（木）

《研究会》18：00～19：20 《懇親会》19：25～21：00

開催場所：大阪府門真市 パナソニック企業年金基金「松心会館」

《理事会》1F レストラン 《研究会》2F 研修室「3」《懇親会》大広間

出席者： 合計 38 名

### ◆研究会：

高垣支部長の挨拶から始まり理事会内容の報告後、新研究会会員の中村様、志水様、羽馬様の紹介がされた。

### I 講演会：

演題：「2030 年包装の未来予測について」

講師・アサヒグループホールディングス株式会社 技術情報室 部長 技術士 島田道雄様

#### 1. 日本包装専士会

包装専士の資質向上、包装技術の発展、会員相互の親睦、を目的に活動している。

2018 年に 2030 年をターゲットに未来の包装の姿について考察する「2030 年の包装の未来予測プロジェクト」の活動を開始。6 時間かかる研究内容発表を、要点を挙げて短時間で講義していただいた。

#### 2. プロジェクトの進め方

1) SDGs の目標を INPUT にして現在の姿とそのギャップを考察し、未来の包装を予測した。

2) 「生活者」「食品ロス」「循環型社会」「包装技術」の 4 つの視点で包装の未来を予測

3) 各年代で何が起きるかを予測し年表を作成。

#### 3. 生活者の視点

1) 2050 年日本の 65 歳以上の人口の割合が 39%になると予測される。

2) 未来の生活環境の 4 つのシナリオを考え（生活空間と人間関係の 2 軸から）、各シナリオで包装の未来を予測した。

#### 4. 食品ロスの視点

1) 2017 年日本の食品自給率は 38%で危機的状態。可食食品のロス量は約 646 万 t であり食品ロスの量を減らせば自給率を改善できる。

2) サプライチェーンの各段階で食品ロスが発生している。各段階で食品ロスの低減を図る技術が利用される。（鮮度保持（ガス透過率可変）、低温輸送、腐敗検知ラベルなど）

#### 5. 循環型社会の視点

1) 世界人口の 30 億人が必要とするタンパク質の 30%を提供しているのは海洋生物体系から。

2) 脱石油系プラスチックの利用：人工光合成技術でオレフィンを製造、CO2 回収・利用技術、セルロース系材料の利用が進む

3) リサイクル：PET ボトルとラベルの分離技術、モノマテリアル、テラサイクルが広がる。

#### 6. 包装技術

1) 日本の環境技術関連特許のうち未利用特許の割合は 33%

2) 開封し易い包装、内容物が残らない包装へ。

3) グラビア印刷からフレキソ印刷へ。インライン印刷とオンデマンド印刷からブランドオーナーの印刷内製化や、店舗でのインライン印刷化に進展する。

4) 医薬品包装では、IT やスマホを利用した多言語化対応や飲量履歴の自動表示など。

#### 7. 総括：未来への方向性の兆しは現在にある

### II 一般社団法人 日本マテリアルフロー研究センターのご説明

ロジスティクス分野では日本で唯一の公的資格検定「ロジスティクス検定」の受検講座を開講している。

◆懇親会：4 月 11 日（木）19:30～20:30 出席者 36 名 松心会館 大広間

岡田相談役の乾杯の音頭で開催し、寺家様の中締めで閉会した。

以上



挨拶の高垣支部長



講師の島田様



新参加者左：羽馬様・志水様・中村様



JMRI の北居様



JIMF の富田様



聴講風景



乾杯の岡田様



会食風景



締め寺家様